

存在論的觀點からみた渦

朝倉友海（北海道教育大学、釧路）

なぜ原子論に着目するか

- <渦>の思想はまずもって古代ギリシアの自然哲学に見いだされる
- 古代の自然哲学は、原子論を通して、近代科学および近代哲学の源流となる
- 原子論哲学への着目は、現代哲学の立場と直結
 - 「自然哲学」の構築・復興という課題（ガッサンディ、ライプニッツ）
 - 「唯物論」的思惟の可能性（マルクス）
 - 「プラトニズムの転倒」という問題意識（ニーチェ、ハイデガー）

プラトンとは異質の思考

- 「古代人によってプラトンと並び称され独創性においてプラトンを凌駕するデモクリトス」 (ニーチェ)
- ルネッサンス以降の哲学や科学とは、デモクリトスの原子論およびアルキメデスの数学の復興であったのではないか——こうミシェル・セール (1930-) は問いかける
 - La naissance de la physique, 1977 邦訳『物理学の誕生』 (1996年)
- 哲学における四つの根源 これからの哲学にとっては？
 - 水、空気、等々 (イオニア学派)
 - 数、「存在」 (イタリア学派)
 - イデア、実体 (プラトン)
 - <渦> (原子論)

2 原子論の思弁的性格

- デモクリトスは(ソクラテスなどと同じく)アナクサゴラスの影響を強く受けて哲学に向かったが、(ソクラテスとは異なり)自然哲学を追究した
- レウキッポスとともに古代原子論の確立者として知られ、「原子」と「空虚」で世界は成立するとした
- さらに、アナクサゴラスの着想を引き継ぎ、事物の構成の原初形態を「渦」とし、原子の集合に生ずる「渦」により宇宙生成を説明
- 数学上の貢献を含む膨大な著作があったが、プラトンがその著作をすべて買い占めて焼き払った？
 - Cf. ディオニソス＝ラエルティオス『哲学者列伝』に伝えられるこの逸話に対するスピノザの態度

エピキュロス主義

- 原子の思弁的性格を強調
 - 原子とは、「感覚によっては識別不可能」なものであり、思考によってのみとらえられるものである
 - 空虚もまた「感覚できる最小よりもさらに小さいもの」であり、「すべてのものはすきまだらけ」である
- 「傾き」ないし偏倚を導入
 - 原子の「傾き」ないし偏倚(ラテン語でclinamen)とは「それによって運動が変化したと言えるか言えないかほど小さい」、「最小より大きくない」ものであり、「不定の時に、不定の場所に」現れる
- 倫理学としての自然学（自然哲学の完成）
 - 迷信を排するという自然哲学の基本的姿勢、無神論・唯物論の伝統

原子と偏倚の思弁性

- 原子論は、小さな実体的な粒子という表象を許さない
- 「ヘロドトス宛書簡」を中心にみた原子論の規定：
 1. 原子は「思考と同じ速度で」動く、「言い表せないほどの空間を一瞬で走行する」
 2. 原子は「最小の連続的な時間の間」一つの方角で運動する
 3. 原子は「考えられうる時間の間」絶えず相互に衝突しあっている
- 差異論的解釈：1) 原子は「極微の時間のあいだ」直線運動をすることで互いに衝突、この一瞬の方角が偏倚 (Deleuze 1969, 310-311) 2) 偏倚はいわばベクトルであり、原子論とはベクトルによる思考である (Serres 1977, 79) 3) 微小な差異の相互規定 (dx/dy のような) としてとらえるエピクロス (Deleuze 1968, 239) → 後述する、差異論への胎動としての原子論

近代とのつながり



- 原子もその偏倚もきわめて思弁的な性格をもっており、それはアルキメデス(前287-212)を通して、近代へとつながる。
 - 「エピクロスの世界におけるユークリッド」としてのアルキメデス(Serres 1977, 35)
- 近代科学は原子論的—微積分的な思考の復興運動であり、それがライプニッツの差異論へとつながる
- 原子論のほうが、プラトンのイデア論よりも、近代へ与えた影響は大きい？

3 原子論における渦

偏倚・乱流・渦卷

- 原子論では、すべてを流れるものとしてとらえる(「すべては不断に流れている」5-280)
- 層流状の流れに生じてくる乱流こそが、経験的世界の発生である
- 原子の偏倚はいわば無限小の乱流であり、乱流から渦的に高次の秩序としての自然が生成する(Serres 1977, 13/106-107)

倫理学としての自然学

- 海から原子が巻き上がることによる雲の形成、雲のなかでの乱流の発生と、渦の形成
- 渦巻きによって原子はまた下降をする、雷は突如として形成される渦であり、大地もまた乱流を生じて振動し、渦を巻いて火が吹き上がる
- このようにして物体は循環し、いたるところに出現する乱流によって、自然環境が成立する
- このような気象の説明は、気象現象こそが古代人を迷信へと向かわせる最大のものであったことによる
- 自然学は倫理学的で無神論的な意味をもつ
 - ソクラテス＝プラトンのような道徳哲学とは異なる伝統

原子論における人間

- 原子の偏移「不定の時に、不定の場所に」は、むしろ「意志（自由意志）」の性質でもあり、さまざまな解釈の余地を残す
 - 原子の主観的解釈の余地→ライブニッツへ
- 生命としての自然:「運命の掟」とは異なる「自然の掟」とは生命固有の秩序である
- 知覚の説明:物体から波のように原子が放出されており、「その流出には停止も休止もない」——物体の表面から放出される諸原子、映像(剥離像、幻影)
 - エピクロスのエイドーロンeidolon(イドラidola)、ルクレティウスのシミュラクル simulacrum
 - あらゆる種類のシミュラクルが到る所に浮遊している」。空間は「信号」で満ちている(Serres 1977, 63)

原子論的発想と渦

- すべてを流れとしてとらえ、層流からの乱流の発生として事物の生成をとらえる
- 乱流の発生は原子の偏倚を条件とする
- 渦としての高次の秩序のなかでも、特に生命が自然哲学の中心的関心を占める
- 生命や精神もまた、すぐれて原子論的なものとして渦的发想のもとに把握される
- だが、古代哲学において渦は、やはり具体的な気象などの現象と結びつけられる傾向があったと言える

4原子論から近代の存在論へ



- 近代的な主体性・主観性の発見にともなって、形而上学＝存在論の再編成が推し進められる
- デカルト(1596-1650)は**イデア論**を主体化した(「観念」の途)
- それに対し、ライプニッツ(1646-1716)は**原子論**を主体化した(モナド論)
- ライプニッツは、差異の理論を発展させる(微積分の確立)
- カント哲学は隠れたライプニッツ主義

モナド: 真の実体、真の原子

- デカルト的二元論から、一元論と多元論へ
 - デカルト以降の存在論は、実体を無限属性からなる絶対的存在者とする方向に向かうとともに(スピノザ)、個体が無限に世界を表現するという方向へも向かった(ライプニッツ)
- わたしたち一人一人こそが真の実体であり、「真の原子」である——ライプニッツはそれを「モナド」と呼ぶ
- 実体は統一体であるが、生命はすべてそうであり、生命はすべてモナドである
 - モナドには階層性がある、人間の精神はそのなかでも最高のもの
- モナドが原子と異なるのは、それが**全宇宙を映し表現する点(視点)**であるということ
 - 原子の主体化としてのモナド、無限の多様性を表現するのがわたしたち

差異論としてのモナド論

- モナドは実体であるとされるが、無限の多様性を示すものとして、むしろ**差異そのものである**
- こうして実体的な原子から、純粹な差異への力点の転換が行われる
 - 微小知覚など微細な差異の次元への着目
- 原子論が実体的な面を残したのに対し、モナド論は原子論の思弁性を引き継ぎ、差異の存在論を構築する
- 世界を映し・かつ世界において働くモナドは、世界を巻き込む渦でもある
 - ドゥルーズによる注釈：モナドは「特異点」を含むことによって個体として成立するが、各特異点はその近傍において、他の特異点まで接続される系列を「巻き込んで」いる（解析接続としての共可能性）

ライプニッツとカント

- 主観概念を完成させたのはカント、超越論的統覚（主観）
- だが主観は実体のカテゴリーでは規定されない（ライプニッツ批判）
 - 一般には、道徳哲学の次元で、人格および「目的の王国」としてライプニッツ哲学は回復されると考えられうる
- だが、カントは実在性のカテゴリーを、外延量ではなく内包量（強度）によりとらえられるとした
- コーエン（1842-1918）によれば、内包量とはもともと「無限小量」を指し、したがってカントにおける実在性の基礎は、（感性ではなく知性から生じる）無限小的なもの（原子！）にある
 - ヘルマン・コーエン、『微分法の原理とその歴史』・『カントの経験理論』（二版）
 - こうした側面は、マイモンやコーエンらにより差異論（差異哲学）として発展

近代哲学と渦

- 渦はデカルトやカントにおいて、自然を説明するときに思い出したように現れる
- かれらはプラトン以来のイデア論に与し、原子論には極力反対したことは示唆的
 - デカルトのイデア＝観念論、カントのイデー＝理念論
- 逆に、原子論に与するライプニッツにおいて、渦は登場することはない
- だが、モナドの最大の特徴である「世界の巻き込み」としての表現作用は、古代哲学における渦の近代哲学における対応物と考えられる
 - この点がさらに突き詰められるのが差異のシステム

5 差異のシステムと渦

- 原子論への注目は自然哲学の復興を意味するが、自然哲学はその後あまりふるわなかった
 - 例外としてのシェリング主義、ラヴェッソン等
- 「真の原子」を求めたライプニッツに対し、ドゥルーズ(1925-95)は『差異と反復』(1968年)において「真のアイデア」を規定することによりニーチェ的な「プラトニズムの転倒」を遂行する
 - 「プラトニズムの転倒」は、ニーチェおよびハイデガーに見られるところの、西洋哲学を総体として批判することで新たな哲学ないし思考を開始しようとする姿勢を指すが、このテーマそのものはルネッサンスにさかのぼることができる例えばベーコンにも同様の見方がみられる

差異が織りなす構造

- 「何か」という問いによって導かれるものは、事物に似たものにすぎない。プラトンにおいても、当初そう考えられていたように事物によって「分有される」ものから、「似像」に対する「実物」として語られるものへと変化していった。
 - 藤沢令夫『アイデアと世界 哲学の基本問題』(岩波書店、一九八〇年)。
- だがアイデアは、事物とまったく似てはいないような何かなのではないか、そのような取り逃がされた本質こそが執拗に回帰する何かではないか？
 - このような社会分析・精神分析への視線は重要であるが今は措く
- 出会いは何かしらのシグナル＝謎を、あるいは記号(シーニュ)を与え、そこから何か新しいものがもたらされる。出会いによって引き起こされるもの、それがアイデアの現実化。
 - プラトンの「想起」説、特に『パイドロス』の「狂気」説にはこの観点が見られる
- 出会いがもたらすのは、相似ではなく差異であり、諸々の差異が生み出す「内的な共振」である。したがって、アイデアないし本質とは、差異が織りなす「構造」である
 - アイデアは差異によって構成された「多様体」multiplicité (つまり、幾重にも折り畳まれたもの)であり、それは十分に規定されており、「微分化されている」
 - アイデアは幾重にも折り畳まれたものとして差異により規定される

差異の存在論と個体化

- 事物は個体化されてはおらず、個体化の過程のなかにある
 - 「仕上げられた」事物は、個体化に対する不十分なる表象にすぎない
- 個体化とは、アイデアの現実化そのものである
 - わたしたちはそのような個体化(＝出来事)を生きている
 - だが、ライブニッツと異なり、ドゥルーズは「わたし」を個体＝主体として認めず、あくまで無意識的な「幼生の主体」に着目
- アイデアないし構造の現実化は、出会いとそれによって生まれる「問い」によって導かれ、「生きられる」
- 事物は空間的・時間的なダイナミズムの中にあることによって「現象」たりうるが、それは差異の構造から、乱流のように生じる「共振」、そこから旋渦のようにして生まれる「強制運動」によって成立（→システム）

「折り開き」と「巻き込み」

- 差異論的な構造からの空間・時間的ダイナミズムの発生は、古代における乱流そして旋渦の形成に相当
- 知覚・表象が安定して成立する局面は、ライプニッツにおいてすでにモナドによる「表現」として、つまり渦として考えられた
 - ドゥルーズの言い方だと特異点による「巻き込み involution」
- 「巻き込み」としての表象の成立に至る一連のプロセスに対してドゥルーズが用いるのが、「折り開き」(開展＝説明 explication) の概念
 - 折り開きは畳み込まれているものを広げて展開することを意味し、記号(シーニュ)ないしシグナルの解読というプロセスを説明する
- 原子論における乱流と渦の発生は、差異論においては「折り開き」と「巻き込み」へと一般化された

折り開き、生命、時間

- 折り開きの代表的な例としての生体の発生
 - 受精卵から細胞の分割を経て個体が発生するように、折り畳み込まれていたものが繰り広げられていく
 - 折り畳まれていたもの、それはつねに差異であり、それ以外ではない（細胞質の物質的な勾配、差異の系列としての遺伝子、等々）
- 生物が典型例なのは、折り開きが、まさに生命と深くかかわっていることによるが、これは**時間論**としても論じられうる
 - 折り開きは、時間において新しいものが到来することであり、未来へと向かう時間の流れそのものであり、つまりは、生きることそのものである
 - 切り裂かれた自我の時間、死への存在
- システムは生きたもの一般のあり方を規定する（構造主義）
 - 生命だけでなく、総体としてとらえられるもの一般——たとえば社会、精神、自然など——すべてに当てはまる
 - 自然のアイデアとしての原子論、生物学的アイデアとしての有機体、マルクス主義的な意味における社会的アイデア、等々

6 結論：渦から存在論へ

- 古代自然哲学が渦巻きの形象によってとらえたものの本質は、近代哲学にかろうじて残った自然の説明における同様の説明図式においてではなく、むしろ一般的なシステムの理論のほうに見いだされる
- 渦の思考は、なによりも存在論的なインスピレーションである
- 渦の思考は、ソクラテス＝プラトンによるイデア論とは異なった哲学の伝統を形成し、「折り開き」や「巻き込み」といった概念を展開してきた
- 差異のシステムへと一般化された自然哲学において、古代における渦の思考は、「折り開き」をめぐる思考の一例と考えられる

存在論的着想としての渦

- 渦が異物のようにして繰り返し表面に上がるのは、むしろイデア論的な系譜においてである
 - デカルトの渦動論やカントの宇宙生成論
- 反対に、差異論へと深化する存在論的な思考は、渦を異物のように扱うことも、症候的に反復することもない
- なぜなら、存在するということ、あるいはわれわれの生そのものの、それがすでに渦(折り開き・巻き込み)であるから
- この意味において、渦は、哲学における異物であるどころか、存在論的思考にとって本質的である
- 根源的なものは、水でも数でも実体でもなく＜渦＞である